

TOEICにおけるリーディング阻害要因

Inhibiting Factors in the TOEIC Reading Test

飯島博之

IIJIMA, Hiroyuki

Saitama Prefectural University

Abstract

This study investigates the causes of difficulty that Japanese university students encounter in taking the TOEIC reading test. The subjects were 307 freshmen at a public university. A questionnaire survey was conducted, and factor analysis performed on the data extracted 8 factors. Further analyses using ANOVA revealed that poor readers feel that they have more difficulties than good readers in (a)the integration of information, (b)linguistic knowledge of the target language, (c)utilizing their schemata, (d)understanding meaningful units of a sentence, and (e)concentrating their attention on taking the test.

キーワード：読解阻害要因、情報統合能力、ボトムアップ処理
トップダウン処理

1. 研究の背景

現在、TOEICは英語の実用能力の尺度として、日本において最も広く用いられている試験の一つであり、企業における人事や大学における英語のクラス編成資料としても利用されているが、TOEICの平均スコアを分析すると、職業別、学年別など、あらゆるカテゴリーにおいてリーディングの得点がリスニングの得点を顕著に下回っている（TOEIC運営委員会 2007）。これは英語のリスニング能力以前に、読解能力がかなり劣っていることを表しており、TOEICの得点を伸ばすためには、リーディング部分の得点力を伸ばすことが不可欠であることは明らかである。そこで、本研究ではTOEICのリーディング部分について、日本人EFL学習者が直面する問題点を明らかにし、さらに各阻害要因の阻害程度を英語読解力の観点から検討することで、今後のTOEIC対策に役立てたいと考えた。本研究で使用したTOEICテストはTOEIC-IPテストであり、現在利用されているTOEICテストの改訂前のいわゆる旧TOEIC-IPである（表1参照）。2006年5月よりTOEIC公開テストが更新され、リーディングセクションにおいてもいくつかの変更が加えられたが（表2参照）、本質的な変更点はない。

表1 旧 TOEICテスト リーディングセクションの内容

| | | |
|-----------------------------|--------------------------|--|
| Reading Section 75分 100問 | Part 5 文法・語彙問題 40問 | 問題文の空所に入れるべき語句を4つの選択肢から選ぶ。 |
| | Part 6 誤文訂正問題 20問 | 問題文に示された4つの箇所から文法的な誤りのあるものを1つ選ぶ。 |
| | Part 7 読解問題 40問 | 文書や図表を読み、それに関する質問について最もふさわしい回答を4つの選択肢から選ぶ。 |

表2 新 TOEICテスト リーディングセクションの内容

| | | |
|-----------------------------|--|--|
| Reading Section 75分 100問 | Part 5 短文穴埋め問題 40問 | 問題文の空所に入れるべき語句を4つの選択肢から選ぶ。 |
| | Part 6 長文穴埋め問題 12問 | 長文中の空所に入れるべき語句を4つの選択肢から選ぶ。 |
| | Part 7 読解問題 1つの文書28問 2つの文書20問 | 文書や図表を読み、それに関する質問について最もふさわしい回答を4つの選択肢から選ぶ。 |

表1からわかるようにリーディングセクションは文法、語彙、語の用法に関わる出題も含んでいる。また、読解問題は会社における連絡文書や図表を含んだ文書、広告、Eメール等が出題されており、職場環境に関する問題の比重が高いのが特徴である。この傾向は現在実施されている新TOEICでも同じである。新TOEICのリーディングセクションにおける主要な変更点はPart 6が長文穴埋め問題に変更になったことであり、文法・語法の知識を問うだけでなく、文脈に基づく文法的判断がより強く求められる傾向になったことである。またPart 7においては関連する2つの文書を読解する問題が導入されたが、本質はビジネス文書の長文読解問題である。Part 5に関し

ては短文・穴埋め問題という名称に変更されてはいるものの、実際の出題内容は文法・語彙・語法問題であり大きな変更点は見られない。一言で言えばTOEICのリーディングセクションは文法・語彙・語法に関わる問題と長文読解から構成されるテストであると言える。以上のことから、利用可能な旧TOEICのデータを用いて予備的調査を行い新TOEICのリーディングセクションへの対策を考えることは十分妥当であると思われる。

ここで読解の成否を左右する要因について目を向ける。Gough, Hoover and Peterson(1996)が指摘するように、読解という過程は多くの下位プロセスから成立しており、それらの下位プロセスの協調が読解の成立にとって必要である。L2読解においては、下位プロセスの中でも、文法力・語彙力などのL2の熟達度とL1での読解力の両方が共に重要であると予想できるが、このどちらがより重要であるかという点についてはAlderson(1984)が研究の方向性を示して以来、様々な実験研究がなされてきた(Perkins, Brutton and Pohlmann 1989; Carrell 1991; Bernhardt and Kamil 1995; Tallefer 1996; Lee and Schallert 1997)。これらの先行研究を総括すると、外国語での読解の成否に与える影響については、(a)母語の読解力と外国語の熟達度の両方が外国語の読解に影響を与える要因であること、(b)外国語の熟達度の影響の方がより大きいこと、の2点が挙げられる。

この結果を踏まえ、Iijima(2004)は日本人EFL学習者を対象に、英語論説文読解における阻害要因となる諸因子と読解力の関係に関する研究を行い、因子分析の結果「テキスト情報統合能力」「スキーマ活用能力」「抽象思考能力」「動機付け」「全体構造理解力」の5因子を抽出した。さらに分散分析の結果、「テキスト情報統合能力」「動機付け」「全体構造理解力」の3因子において読解力上位者と読解力下位者の間に有意差が見られた。この結果から、日本人EFL学習者の読解阻害要因研究においては、L2熟達度やL1での読解力に関わる諸因子の他に、L2学習に関わる心理的、情意的要因も考慮しなければならないことがわかる。そこで、本研究ではIijima(2004)を基にTOEICのリーディングセクションの阻害要因となる諸因子について研究を進めてゆく。

2. 研究の目的

本研究は、公立大学1年生を対象として、(1)新TOEICのリーディングセク

ションにおける阻害要因の調査票(5段階尺度形式)を開発すること(Appendix 2)、(2)今回の調査で使用した調査票原案(Appendix 1)を用いてTOEICのリーディングにおける阻害要因を抽出すること、(3)阻害要因として抽出された各因子とリーディング部分の得点との関係を明らかにすること、の3点である。

3. 研究の方法

- ①対象者：公立大学1年生307名（帰国子女を含まない）
- ②調査実施期間：平成18年4月（TOEIC-IP実施）、
10月（アンケート実施）。
- ③手続き：大学1年生の英語の授業においてTOEICのリーディング部分を受験した際の阻害要因について34項目からなる5段階尺度形式のアンケートを実施した。この調査票はIijima（2004）で開発された読解不全要因に関するアンケート用紙を基に、大学1年生46名を対象とした自由記述形式によるアンケート調査の結果（平成18年6月）も考慮して開発したものである。学生は通常の授業の中で、アンケートの趣旨について説明を受け同意した上でアンケートに回答した。回答は「1：全くあてはまらない、2：あまりあてはまらない、3：どちらとも言えない、4：まああてはまる、5：よくあてはまる」の中で1点から5点までの間で得点化を行った。回答者には帰国子女など海外で長期間の英語での教育を受けた経験があるものがないことを確認した上で、全調査項目に回答のあった307名が分析対象とされた。対象学生は、本学入学後の4月に実施されたTOEIC-IPのリーディング部分の得点（Mean:157.2, SD:45.3）に基づき上位群（180点以上：103名）、中位群（140点以上～180点未満：99名）、下位群（140点未満：105名）の3群に分けられた。
- ④測定具：34項目からなるアンケート。先行研究、自由記述アンケート、経験ある英語教師の意見に基づいて予備調査を行ない、因子負荷量を考慮して開発した英語論説文読解の阻害要因に関する調査票（Iijima 2004）を基に開発した（Appendix 1）。実際にTOEICを受験した46名の学生による自由記述アンケート結果にTOEICの内容、出題形式、受験

上の制約等を考慮して質問項目を追加あるいは削除した。

⑤ 分析方法：因子分析、分散分析

4. 結果

4.1 TOEIC-IPの結果の分散分析

まず、TOEIC-IPにおけるリーディング部分の平均値と標準偏差は表3のとおりである。分散分析の結果、上位群、中位群、下位群の得点には有意差が認められ ($F_{(2,304)}=579.9, p<.01$)、Scheffeを用いた多重比較(5%水準)により、TOEIC-IPのリーディング得点において、上位群>中位群>下位群という関係の有意差が存在することが確認された。

表3 TOEIC-IPリーディング部分の平均値と標準偏差

| | 人数 | 平均値 | 標準 偏差 | 標準 誤差 | 平均値の 95% | | 最小 値 | 最大 値 |
|-----|-----|--------|----------|----------|----------|--------|---------|---------|
| | | | | | 信頼区間 | | | |
| | | | | | 下限 | 上限 | | |
| 上位群 | 103 | 205.97 | 29.13 | 2.87 | 200.28 | 211.66 | 180 | 340 |
| 中位群 | 99 | 158.43 | 9.76 | .98 | 156.49 | 160.38 | 140 | 170 |
| 下位群 | 105 | 108.24 | 18.17 | 1.77 | 104.72 | 111.76 | 45 | 135 |
| 合計 | 307 | 157.21 | 45.27 | 2.58 | 152.13 | 162.30 | 45 | 340 |

最高可能得点：495点

4.2 アンケート調査の因子分析

次に、34項目からなる5段階尺度形式のアンケート調査への回答について、「よくあてはまる」を5点、「まったくあてはまらない」を1点とし、中間段階を1点刻みで得点化した。ここでSPSSを用いて、質問項目の信頼度係数を測定し(Alpha = .892)、他の項目の合計得点との相関係数(Corrected Item-Total Correlation)が0.3未満の3項目(Appendix 1:項目19, 30, 31)の内容を検討した。この3項目は他の項目との意味的な重複が見られたり、内容が異質であったりする項目であると判断し、これらの項目を削除し、残りの31項目を用いて分析を進めることにした(Alpha = .896)。

4.3 新TOEICのリーディング障害要因アンケートの開発

4.2において削除した3項目の代わりに新TOEICにおいて新たに導入された長文穴埋め問題や2種類の文書を読む読解問題などを考慮

した質問項目を追加した (Appendix 2:項目19, 30)。また質問が曖昧であった項目を修正した (Appendix 2:項目13, 31)。最終的には新TOEICのリーディング阻害要因に関する質問項目は合計34項目となった (Appendix 2)。

4.4 阻害要因の抽出

4.2において残った31項目を対象として因子分析を実施するに当たり、因子の抽出には重み付けのない最小二乗法を用い、固有値1以上の基準を設け、さらに因子の解釈の可能性も考慮して8因子とした。プロマックス回転を行った結果の因子パターンを表4に示した。なお、因子間相関は表5のようになった。

第I因子は、事実関係の整理、重要な情報を含んだ文の特定、概要の理解、話の展開の予測に関わっており全体的な意味を把握する能力に関わる因子であると考えられるので「情報統合能力」に関わる因子と判断した (表6参照)。第II因子は語法、語彙力、文法知識に関わるものであるので、「目標言語の知識」に関する因子と判断した (表7参照)。第III因子は背景知識の有無や活用に関わっており、「スキーマの活用」に関わる因子と判断した (表8参照)。第IV因子は文の構造の理解、指示語の理解、無生物主語の使用に関係しており「構造理解力」に関わる因子と判断した (表9参照)。第V因子はテキスト理解過程での和訳の使用、自己のテキスト理解度の判断、単語の意味を統合し文レベルで意味を理解する能力、テキストを全体的に理解する能力などに関係しており「テキスト処理能力」に関わる因子と判断した (表10参照)。第VI因子は問題の数と時間配分についての因子であり、「問題数への対応」に関わる因子と判断した (表11参照)。第VII因子は試験問題に最後まで集中できるかどうかという「集中力」の因子である (表12参照)。また第VIII因子はTOEICの問題形式に関わる「問題形式への対応」の因子であると判断した (表13参照)。

4.5 標準因子得点の平均値に基づく分散分析

次に、各因子の標準因子得点の平均値に基づいて分散分析を行った。第I因子「情報統合能力」($F_{(2,304)}=6.52, p<.01$)、第II因子「目標言語の知識」($F_{(2,304)}=7.6, p<.01$)、第III因子「スキーマの活用」($F_{(2,304)}=6.4, p<.01$)、第IV因子「構造理解力」($F_{(2,304)}=9.85, p<.01$)、第VII因子「集中力」($F_{(2,304)}=10.6, p<.01$)において有意差が見られ、Scheffeを用いた多重比較 (5%水準) の結果、第I因子「情報統合能力」、第II因子「目標言語の知識」、第III因子「スキーマの

活用」、第Ⅶ因子「集中力」において上位群<下位群の関係に有意差が見られ、第Ⅳ因子「構造理解力」においては読解力上位群<読解力下位群ならびに読解力中位群<読解力下位群の関係に有意差が認められた。

表 4 プロマックス回転後の因子パターン

| | 因子 | | | | | | | |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| Q1 | .060 | .687 | .041 | -.144 | -.042 | .031 | .088 | -.137 |
| Q2 | -.029 | .308 | .329 | .109 | -.072 | .242 | .013 | -.093 |
| Q3 | -.039 | .838 | .029 | -.033 | -.024 | -.091 | .028 | .044 |
| Q4 | .342 | .295 | -.004 | .035 | .006 | -.003 | -.055 | .082 |
| Q5 | -.053 | .653 | -.036 | .147 | -.006 | -.054 | -.024 | .095 |
| Q6 | .040 | .108 | -.089 | .761 | .060 | -.223 | -.011 | -.014 |
| Q7 | -.151 | .038 | .127 | .660 | .106 | -.021 | -.126 | .093 |
| Q8 | -.118 | .002 | -.088 | .045 | .602 | .000 | .079 | .056 |
| Q9 | .168 | -.171 | -.033 | .677 | -.024 | -.019 | .091 | -.073 |
| Q10 | .185 | .085 | -.162 | .468 | .049 | .109 | .034 | -.084 |
| Q11 | .373 | .106 | -.235 | -.015 | .347 | .123 | .033 | .004 |
| Q12 | .073 | -.091 | -.101 | -.109 | .150 | .648 | -.027 | .028 |
| Q13 | .011 | .025 | -.052 | -.106 | -.078 | .692 | .061 | .057 |
| Q14 | -.249 | -.039 | .038 | .034 | .044 | .251 | .008 | .515 |
| Q15 | .164 | .052 | .011 | .086 | -.127 | .269 | -.009 | .367 |
| Q16 | .218 | .019 | .035 | -.124 | .038 | -.107 | .045 | .711 |
| Q17 | .696 | .038 | .018 | .008 | .032 | -.065 | -.027 | .044 |
| Q18 | .139 | -.074 | -.094 | .040 | .425 | .021 | -.019 | .167 |
| Q20 | .612 | -.007 | .063 | .243 | -.121 | -.021 | .028 | -.013 |
| Q21 | .709 | -.034 | .059 | .059 | -.173 | .160 | .019 | -.110 |
| Q22 | .079 | .066 | .669 | -.108 | .000 | -.054 | .005 | .033 |
| Q23 | .115 | .047 | .778 | -.042 | .008 | -.099 | -.015 | -.016 |
| Q24 | .340 | -.094 | .388 | .116 | .059 | -.021 | .019 | .090 |
| Q25 | .511 | -.107 | .241 | -.120 | .149 | -.043 | -.046 | .042 |
| Q26 | -.008 | .053 | .344 | -.100 | .498 | .002 | -.007 | -.071 |
| Q27 | -.075 | -.102 | .142 | .192 | .467 | .002 | .092 | -.126 |
| Q28 | .035 | -.025 | .117 | .036 | .193 | .351 | -.118 | -.017 |
| Q29 | -.134 | -.131 | .354 | .141 | -.109 | .073 | .161 | .197 |
| Q32 | -.074 | .064 | .042 | -.002 | .041 | .008 | .711 | .095 |
| Q33 | .051 | .026 | .000 | .003 | .087 | .000 | .844 | -.032 |
| Q34 | .012 | .291 | .056 | .146 | .161 | .159 | -.049 | -.005 |

因子抽出法：重みなし最小二乗法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表5 構造行列

| | 因子 | | | | | | | |
|-----|------|------|------|------|------|------|------|-------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| Q1 | .280 | .654 | .222 | .257 | .055 | .134 | .227 | -.040 |
| Q2 | .364 | .517 | .506 | .448 | .220 | .391 | .209 | .182 |
| Q3 | .323 | .794 | .291 | .403 | .110 | .123 | .221 | .091 |
| Q4 | .518 | .470 | .306 | .404 | .294 | .262 | .147 | .262 |
| Q5 | .323 | .687 | .261 | .470 | .171 | .172 | .171 | .164 |
| Q6 | .394 | .468 | .259 | .735 | .288 | .102 | .146 | .178 |
| Q7 | .341 | .379 | .414 | .695 | .384 | .281 | .053 | .320 |
| Q8 | .228 | .099 | .124 | .238 | .554 | .265 | .071 | .250 |
| Q9 | .419 | .276 | .271 | .637 | .268 | .233 | .233 | .212 |
| Q10 | .454 | .409 | .205 | .584 | .328 | .328 | .200 | .192 |
| Q11 | .550 | .302 | .148 | .347 | .539 | .401 | .157 | .285 |
| Q12 | .286 | .043 | .130 | .149 | .404 | .657 | .089 | .318 |
| Q13 | .240 | .138 | .158 | .157 | .221 | .648 | .211 | .306 |
| Q14 | .120 | .021 | .217 | .194 | .257 | .416 | .135 | .566 |
| Q15 | .444 | .269 | .333 | .390 | .285 | .496 | .229 | .548 |
| Q16 | .461 | .150 | .340 | .267 | .350 | .310 | .245 | .751 |
| Q17 | .726 | .364 | .367 | .420 | .401 | .285 | .183 | .327 |
| Q18 | .378 | .093 | .177 | .276 | .542 | .317 | .052 | .369 |
| Q20 | .703 | .412 | .415 | .549 | .310 | .301 | .263 | .304 |
| Q21 | .692 | .348 | .368 | .411 | .269 | .374 | .244 | .236 |
| Q22 | .360 | .284 | .676 | .273 | .231 | .202 | .145 | .263 |
| Q23 | .434 | .338 | .790 | .363 | .278 | .207 | .146 | .269 |
| Q24 | .610 | .299 | .619 | .485 | .428 | .353 | .217 | .427 |
| Q25 | .573 | .170 | .433 | .265 | .422 | .266 | .094 | .318 |
| Q26 | .356 | .221 | .461 | .270 | .555 | .294 | .044 | .224 |
| Q27 | .269 | .133 | .291 | .336 | .490 | .250 | .102 | .162 |
| Q28 | .312 | .157 | .300 | .277 | .419 | .470 | .003 | .259 |
| Q29 | .154 | .079 | .399 | .250 | .093 | .233 | .258 | .338 |
| Q32 | .242 | .252 | .223 | .245 | .092 | .238 | .742 | .289 |
| Q33 | .338 | .286 | .221 | .283 | .132 | .258 | .861 | .244 |
| Q34 | .392 | .462 | .336 | .455 | .384 | .377 | .118 | .235 |

因子抽出法: 重みなし最小二乗法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表6 第I因子:情報統合能力

| No | 質問内容 | 因子 負荷量 | 信頼度係数 |
|----|--|-----------|------------|
| 21 | 文章中で述べられている細かな事実関係が整理できなかった。(例:登場人物の名前と彼らの行為の対応など) | .709 | Alpha=.712 |
| 17 | 解答のために重要な情報を含んだ文を特定するのが難しかった。 | .696 | |
| 20 | 文章の概要の理解ができなかった。 | .612 | |
| 25 | 話の展開を予測することができなかった。 | .511 | |

表7 第II因子:目標言語の知識

| No | 質問内容 | 因子 負荷量 | 信頼度係数 |
|----|--------------------------|-----------|------------|
| 3 | 語法(個々の単語の使い方)の知識が不十分だった。 | .836 | Alpha=.730 |
| 1 | 自分は語彙力(単語・熟語の知識)が不足していた。 | .687 | |
| 5 | 文法の知識が不足していた。 | .653 | |

表8 第III因子:スキーマの活用

| No | 質問内容 | 因子 負荷量 | 信頼度係数 |
|----|-----------------------------------|-----------|------------|
| 23 | 取り上げられている内容に関する自分の知識を十分に利用できなかった。 | .778 | Alpha=.756 |
| 22 | 取り上げられている内容に関する十分な知識を持っていなかった。 | .669 | |

表9 第IV因子:構造理解力

| No | 質問内容 | 因子 負荷量 | 信頼度係数 |
|----|---|-----------|------------|
| 6 | 文の構造が分からなかった。(例:文の主語はどこまでか / 意味の切れ目はどこか) | .761 | Alpha=.754 |
| 9 | 指示語が何を指しているか分からなかった。(例1: Several students came to my office. <u>They</u> seemed excited.) (例2: Which scarf do you like best, the blue <u>one</u> or the red <u>one</u> ?) | .677 | |
| 7 | 無生物主語の場合、英文の意味が理解しにくかった。(例: <u>The bad weather</u> made them cancel the game.) | .660 | |
| 10 | 1つのセンテンス(文)が長いと、文の構造が理解できなくなった。 | .468 | |

表10 第V因子:テキスト処理能力

| No | 質問内容 | 因子 負荷量 | 信頼度係数 |
|----|--|-----------|------------|
| 8 | 英文を一文ずつ和訳しながら文章を理解した。 | .602 | Alpha=.609 |
| 26 | 自分がどの程度まで内容を理解できているか(わかっているか、いないか)ということがわからなかった。 | .498 | |
| 27 | 個々の単語の意味は分かるが文としての意味がつかめなかった。 | .467 | |
| 18 | 理解できない部分を読みとばして進むことができなかった。 | .425 | |

表 11 第 VI 因子：問題数への対応

| No | 質問内容 | 因子 負荷量 | 信頼度係数 |
|----|------------------|-----------|------------|
| 13 | 問題数が多すぎた。 | .692 | Alpha=.602 |
| 12 | 解答のための時間配分に失敗した。 | .648 | |

表 12 第 VII 因子：集中力

| No | 質問内容 | 因子 負荷量 | 信頼度係数 |
|----|-------------------|-----------|------------|
| 33 | 最後まで集中力が持続できなかった。 | .844 | Alpha=.769 |
| 32 | 途中であきらめてしまった。 | .711 | |

表 13 第 VIII 因子：問題形式への対応

| No | 質問内容 | 因子 負荷量 | 信頼度係数 |
|----|---|-----------|------------|
| 16 | 問題にどのように対処すべきか分からなかった。 (例：まず質問を読んでおくかどうか。表を先に見るか等) | .711 | Alpha=.548 |
| 14 | TOEIC の問題形式に戸惑った。 | .515 | |

5. 考察

第 I 因子「情報統合能力」は英語論説文読解における阻害要因に関する飯島のこれまでの研究においても必ず抽出された因子である。阻害要因としての受け止め方において、読解力下位群 > 読解力上位群の有意差が認められたことから、読解力下位者の方が情報統合能力に問題があることが示された。情報統合能力はBlock(1986)において既に指摘されている様に読解力の差を生み出す主要な因子と考えられる。

第 II 因子「目標言語の知識」は語彙、語法、文法の知識に関わる因子であり、ボトムアップ処理の基盤である。読解力下位群 > 読解力上位群の関係に有意差が認められたことから、読解力下位者は語彙力、語法知識や文法知識に問題を抱えていることが示された。

第Ⅲ因子「スキーマの活用」は背景的知識の活用能力に関わる因子で、トップダウン処理能力を反映する代表的な因子である。様々な先行研究において、読解力上位者はテキスト処理過程においてトップダウン処理を有効に利用できることが示されているが(Iijima 2004)、本研究においても読解力下位群>読解力上位群の関係に有意差が認められているので、読解力下位者は背景知識が不足していたり、あるいは背景知識を利用する能力において劣っていることが示された。TOEICはビジネス文書に基づく出題が多いので、ビジネスの様々な場面に関する背景的知識は内容理解に大いに役立つことが推察される。

第Ⅳ因子「構造理解力」において、読解力下位群>読解力中位群、読解力下位群>読解力上位群の関係の各々に有意差が認められたことから英文の文法的な分析能力や指示語の指す内容理解などのボトムアップ処理において読解力下位者は劣っていることが推察される。

第Ⅴ因子「テキスト処理能力」は英文の意味を把握する能力であり、大量の英文を処理する必要があるTOEICにおいては重要である。

第Ⅵ因子「問題数への対応」はTOEIC特有の因子であると言える。リーディング部分に関しては75分間で100問を解答する必要があり、多くの問題を制限時間内に処理する際の判断力が重要であると推察される。

第Ⅶ因子「集中力」は学習者の情意要因に関わる因子であるが、Iijima(2004)において「動機付け因子」と命名された因子を形成する質問項目の一部に今回と同様の質問項目が含まれている。集中力において、読解力下位群>読解力上位群の関係に有意差が示されており、集中力の有無が読解力に影響することが確認された。

第Ⅷ因子「問題形式への対応」も第Ⅵ因子同様にTOEIC特有の因子である。語彙、語法、文法に関わる問題がテキストの内容理解と融合して出題されていると同時に、読解問題ではビジネス文書やEメールの形式、図表の読み取りなどが数多く出題されるので問題形式への慣れは大変重要である。

以上の様に、抽出された8つの因子のうち5つの因子において読解力下位者と上位者の間に有意差が認められた。つまり、読解力上位者は文法力、語彙力に優れており、文法に基づいて英文を分析的に理解することができるだけでなく、背景的知識を活用しつつ、理解した情報を統合し、テキスト全体の中から重要ポイントを把握す

る能力においても優れていることが推察される。言い換えれば、読解力上位者はボトムアップ処理能力とトップダウン処理能力の両面において優れていることになる。門田・野呂(2001)が先行研究の結果を集約し、L2での読解作業はL1での読解よりも低次処理に認知資源の多くを費やさなければならないので、対象言語の熟達度次第でL2読解においてどの程度の高次読解作業に従事できるかが決まってくるという指摘をしているが、本研究の結果はそれらの指摘を裏付けており、読解力上位者はボトムアップ処理能力に優れており、処理がある程度自動化されているため、限られた注意力のうち、より多くの部分をトップダウン処理にも利用できることが推察される。

6. 結論

本研究の結果は飯島がこれまで実施した読解ストラテジー、読解不全要因に関する諸研究の結果と基本的に一致するものである。

TOEICテストリーディングセクションの得点のためには、ボトムアップ処理とトップダウン処理の両方から成る情報統合能力の養成が第一義であるが、その根幹は語彙力と文法能力に支えられたボトムアップ処理能力であろう。ボトムアップ処理をどこまで自動化できるかがL2読解力養成の課題であると思われる。また、TOEICは長時間にわたって大量の問題を解くテストであるため、集中力を失わずに最後までテストに注意力を注ぐ重要性が確認された。

本研究で用いた旧TOEIC-IP実施直後、2006年5月から新TOEIC導入となり、テスト内容が部分的に変更されているので、今回の調査票を基に、新TOEICに対応した質問項目(Appendix 2 参照)を加えて、同様の研究を再度行う予定である。また、今回の研究ではTOEIC-IP実施からアンケート調査までの期間が開いてしまったため、次回の研究ではTOEIC-IP後、できるだけ早い時期にアンケート調査を実施して学生の意識をより正確に反映した調査を実施したい。

参考文献

- Alderson, J. C. (1984). Reading in a foreign language: A reading problem or a language problem? In J. C. Alderson & A. H. Urquhart (Eds.), *Reading in a Foreign Language*. London: Longman.
- Bernhardt, E & Kamil, M. (1995). Interpreting relationships between L1 and L2 reading: Consolidating the linguistic threshold and the linguistic interdependence hypotheses. *Applied Linguistics*, 16, (1), 15-34.
- Block, E. (1986). The comprehension strategies of second language readers. *TESOL Quarterly*, Vol.20., No.3, pp.463-494.
- Carrell, P.L. (1991). Second language reading: Reading ability or language proficiency? *Applied Linguistics*, 12 (2), 159-179.
- Gough, P.B., Hoover, W.A. & Peterson, C.L. (1996). Some observations on a simple view of reading. In C. Cornoldi and J. Oakhill(Eds.), *Reading Comprehension Difficulties Processes and Intervention*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- 飯島博之(2000a). 「テキストの難易度が日本人EFL学習者の読解ストラテジー使用に及ぼす影響に関する研究」『関東甲信越英語教育学会研究紀要』第14号 93-101.
- 飯島博之(2000b). 「日本人EFL学習者の英文読解ストラテジーに関する研究」国立高等専門学校協会論文集『高専教育』第23号 19-24.
- Iijima, H. (2004). Sources of comprehension failure in EFL reading. 『上越英語研究』 第4号 3-12.
- 飯島博之(2006). 「EFL読解における阻害要因と学年差」『茨城工業高等専門学校研究彙報』第41号 9-15.
- 門田修平・野呂忠司(2001). 『英語リーディングの認知メカニズム』

くろしお出版

- Lee, J. & Schallert, D.L. (1997). The relative contribution of L2 language proficiency and L1 reading ability to L2 reading performance: A test of the threshold hypothesis in an EFL context. *TESOL Quarterly*, 31, (4), 713-739.
- Perkins, K., Brutten, S.R., & Pohlmann, J.T. (1989). First and second language reading comprehension. *RELC Journal*, 20 (2), 1-9.
- Taillefer, G.F. (1996). L2 reading ability: Further insight into the short-circuit hypothesis. *The Modern Language Journal*, 80, (4), 461-477.
- TOEIC運営委員会(2007). 「TOEICテストDATA&ANALYSIS 2006」
財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

Appendix 1: 旧TOEIC用リーディング阻害要因アンケート(本研究で使用したアンケート)の質問項目

私がTOEICのリーディング部分を受験した際:

- 1 自分は語彙力(単語・熟語の知識)が不足していた。
- 2 多くの意味がある単語の場合、どの意味で使われているのかわからなかった。
- 3 語法(個々の単語の使い方)の知識が不十分だった。
- 4 未知語(新出単語)の意味を文脈(前後関係)から類推できなかった。
- 5 文法の知識が不足していた。
- 6 文の構造がわからなかった。
(例: 文の主語はどこまでか / 意味の切れ目はどこか)
- 7 無生物主語の場合、英文の意味が理解しにくかった。
(例: The bad weather made them cancel the game.)
- 8 英文を一文ずつ和訳しながら文章を理解した。
- 9 指示語が何を指しているかわからなかった。
(例1: Several students came to my office. They seemed excited.)
(例2: Which scarf do you like best, the blue one or the red one?)
- 10 1つのセンテンス(文)が長いと文の構造が理解できなくなった。
- 11 英文を速読することができなかった。
- 12 解答のための時間配分に失敗した。
- 13 問題数が多すぎた。
- 14 TOEICの問題形式に戸惑った。
- 15 質問も英語であったため、理解に手間取った。
- 16 問題にどのように対処すべきかわからなかった。
(例: まず質問を読んでおくかどうか。表を先に見るか等)
- 17 解答のために重要な情報を含んだ文を特定するのが難しかった。
- 18 理解できない部分を飛ばして読み進むことができなかった。
- 19 問題用紙に書き込みができず、やりにくかった。
- 20 文章の概要の理解ができなかった。
- 21 文章中で述べられている細かな事実関係が整理できなかった。
(例: 登場人物の名前と彼らの行為の対応など)
- 22 取り上げられている内容に関する十分な知識を持っていなかった。
- 23 取り上げられている内容に関する自分の知識を十分に利用できなかった。
- 24 グラフや表のある問題で、それらを十分に活用できなかった。
- 25 話の展開を予測することができなかった。
- 26 自分がどの程度まで内容を理解できているか(わかっているか、いないか)ということがわからなかった。
- 27 個々の単語の意味はわかるが文としての意味がつかめなかった。
- 28 長文を読解している最中にあせってしまった。
- 29 取り上げられている内容に興味を持てなかった。
- 30 試験途中で疲れてしまった。
- 31 時間が足りなかった。
- 32 途中であきらめてしまった。
- 33 最後まで集中力が持続できなかった。
- 34 英語の長文読解は苦手であるとの意識が強かった。

Appendix 2: 新TOEIC(現行)用に今回開発したリーディング阻害要因アンケートの質問項目

私がTOEICのリーディング部分を受験した際:

- 1 自分は語彙力(単語・熟語の知識)が不足していた。
- 2 多くの意味がある単語の場合、どの意味で使われているのかわからなかった。
- 3 語法(個々の単語の使い方)の知識が不十分だった。
- 4 未知語(新出単語)の意味を文脈(前後関係)から類推できなかった。
- 5 文法の知識が不足していた。
- 6 文の構造がわからなかった。
(例: 文の主語はどこまでか / 意味の切れ目はどこか)
- 7 無生物主語の場合、英文の意味が理解しにくかった。
(例: The bad weather made them cancel the game.)
- 8 英文を一文ずつ和訳しながら文章を理解した。
- 9 指示語が何を指しているかわからなかった。
(例1: Several students came to my office. They seemed excited.)
(例2: Which scarf do you like best, the blue one or the red one?)
- 10 1つのセンテンス(文)が長いと文の構造が理解できなくなった。
- 11 英文を速読することができなかった。
- 12 解答のための時間配分に失敗した。
- 13 問題数が多すぎて時間が足りなかった。
- 14 TOEICの問題形式に戸惑った。
- 15 質問も英語であったため、理解に手間取った。
- 16 問題にどのように対処すべきかわからなかった。
(例: まず質問を読んでおくかどうか。表を先に見るか等)
- 17 解答のために重要な情報を含んだ文を特定するのが難しかった。
- 18 理解できない部分を飛ばして読み進むことができなかった。
- 19 文主全体の中で文脈(前後関係)を考慮し、答えを判断するのが難しかった。
(例: 長い文章を完成させるために、文章中の複数の空欄に適する語をそれぞれ選ぶ問題)
- 20 文章の概要の理解ができなかった。
- 21 文章中で述べられている細かな事実関係が整理できなかった。
(例: 登場人物の名前と彼らの行為の対応など)
- 22 取り上げられている内容に関する十分な知識を持っていなかった。
- 23 取り上げられている内容に関する自分の知識を十分に利用できなかった。
- 24 グラフや表のある問題で、それらを十分に活用できなかった。
- 25 話の展開を予測することができなかった。
- 26 自分がどの程度まで内容を理解できているか(わかっているか、いないか)ということがわからなかった。
- 27 個々の単語の意味はわかるが文としての意味がつかめなかった。
- 28 長文を読解している最中にあせってしまった。
- 29 取り上げられている内容に興味を持てなかった。
- 30 2つの資料(手紙・表等)を両方読んで、必要な情報を見つけることが難しかった。
- 31 問題が難しすぎて時間が足りなかった。
- 32 途中であきらめてしまった。
- 33 最後まで集中力が持続できなかった。
- 34 英語の長文読解は苦手であるとの意識が強かった。

* 質問項目13, 19, 30, 31は修正が加えられたものである。